

カワウは自分のとまり場を占有しているか

○加藤ななえ(バードリサーチ) 嶋徹(千葉市野鳥の会)

カワウは、海や河川湖沼で数羽から数千羽の群れで魚を採っているところがよく観察されている。またカワウは数羽から数万羽の規模のねぐらやコロニーを形成する。カワウは集団性の強い鳥である。ねぐらやコロニーは、外敵の侵入がないような安全な場所であれば、長期にわたって利用され続ける。つまり、カワウは集団で場所を占有する傾向があるといえる。また、東京都にある上野公園内の不忍池のコロニーでは、長年にわたる観察より、それぞれのカワウが自分のとまり場を持っている(福田 1981)と言われている。そこで、繁殖活動が行われない「ねぐら」においても、カワウが自分のとまり場を占有しているかどうかを調べることにした。簡単には移動させることができない巣の場所に縛られることがないため、決まったとまり場への執着は弱くなるのだろうか。それともやはり自分のとまり場を確保しているのだろうか。

調査は、千葉県にある、東京湾に面したおよそ 300 羽から 500 羽の規模のねぐらで行った。私有地の緑化ゾーンにある池に面した樹林がねぐらとして利用されている。個体識別をするために、刻印が読み取れるカラーリングの標識をされた個体の発見に努めた。そのような個体を見つけた時には、年月日、時刻、リングの刻印、止まっている樹木、止まっている枝の位置(高さや池からの距離などを含む)を記録した。

2008年1月から2009年6月の間に、176日の観察を行ない、カラーリングをつけた0歳から8歳の標識個体を21羽確認した。個体識別ができたカワウがこのねぐらに滞在していたことが確認された日数は、2日から114日であった。識別ができる個体を見つけられなかった時は、この特定の個体がこのねぐらにいるのに見つからないのか、もしくは他のねぐらへ移動してしまっているのかは不明である。全調査期間を通じて特定の場所だけに居続けた個体もあれば、複数(2~4箇所)の場所を利用する個体もあった。そこで、6日以上観察することができた15個体のデータを使い、各個体が最も長くいたとまり場(A)への定着率を求めることにした。

定着率 = (A)で観察された日数 / このねぐら内で観察された日数  
定着率の15個体分の平均は、0.8620(0.5~1)であった。

このことより、繁殖活動が行なわれない「ねぐら」でも、カワウは自分のとまり場を占有している傾向が高いと考えられた。